



幼い頃、実家で楽しめた果物と言うと、カキ、ダイダイ、イチジク、クリ、ピワというところだろうか。それ以外にもあったかも知れないが、もう思い出せない。それにすでに実家は、父のアスパラ作りを継いでくれている若者に引き渡したから、好き勝手に収穫していたそれらも、断っていただくしかなくなってしまった。今年初め頃に、たまたま立ち寄って若者に挨拶した際に、ダイダイを4つばかりいただいできた。

幼い頃の私にとって果物とは、我が家にあったものではなく、家にはないミカンとかパイナップルとかバナナ、そしてリンゴだった。我が家では冬野菜は下関の市場に出荷していたから、その際に父が市場の職員のお願いで、ミカンやリンゴを箱買いしていた。いや、リンゴはモミガラの詰まった箱に入れて売られていた気がするのだが。そんなわけだから、果物にしては大ぶりのリンゴが樹にたわわに実っていると、つつい興奮してしまうし、徳佐方面にリンゴの時期に出掛けると必ず買って来る。記事に書いたように、現在徳佐には15,000本ものリンゴの樹があるというから凄い。イラストの樹には100個近く実を付けているから、単純には総生産量は150万個となるが、実際のところどうなのだろう。昨年春と秋に徳佐を訪れた。いずれも石州街道の取材を兼ねたものだったが、4月に花を付けたリンゴの樹を見て、実をつけたリンゴの樹を連載の題材の一つにしようと考えていたのである。秋に訪れたのは友清リンゴ園ではなかったが、ルーツは同じだからと気にせず描くことにした。(2024.3.20 記)



**イラストでたどる石州街道 24 徳佐リンゴ**

街道の歴史とは外れるが、石州街道沿いの果物という、まず思い出すのは徳佐リンゴで、幼い頃にリンゴ栽培の南限と聞かされた記憶がある。徳佐リンゴの創始者は友清隆男氏。戦後の昭和21年に徳佐に入植して栽培を開始し、長野県以南のリンゴ暖地栽培の嚆矢として高く評価されている。心配されたのは気象条件だったが、確実な気象データに基づき、雨量は長野県と大差がないこと、大きな昼夜の気温差などを考慮して幾つかの候補の中から徳佐を選んだと言われている。

現在、栽培戸数は15戸で、30種、一万五千本が栽培されている。暖地特性を生かして早くも8月から収穫を開始し、かつ12月頃まで楽しむことが出来るのだそうである。

文イラスト 古谷眞之助

